

つながりあうことうら

第4号 2007.2.1 発行：琴浦町同和教育推進協議会



浦安小学校5年生による実践発表

ラインダンスby39 サンキュー

2006年12月17日(日) カウベルホール

第2回琴浦町人権・同和教育推進大会 (2・3面)

あかさき部落解放文化祭

(4・5面)

同和保育公開研究会

(6面)

大山乳業の取り組み／

全国人権・同和教育研究大会

参加報告 (7面)



二〇〇六年十二月十七日、カウベルホールにおいて第二回人権・同和教育推進大会が開催されました。

実践報告では、浦安小学校五年生のみなさんによる仲間づくりの取り組みとしてのラインダンスと、赤碕中学校の市田光さんから人権作文の発表がありました。

その後、解放社会学研究所の江嶋修作さんから「人権・同和教育は誰のため？」と題して講演をしていただきました。

みんなと過ごせることがうれしい

浦安小学校五年生 ラインダンス by 39

私たち五年生は39人です。39人、サンキューの仲間です。四月に学級目標を「ワンフオーオール オールフオーワン」「ひとりは、みんなのために みんなは、ひとりのために」と決めました。

その目標を達成するために一人一人が何をしたらいいのかということ、常に学級の課題として話し合い、みんな仲間づくりについて考えてきました。それが少しわかったような気がしたのが、学習発表会でのラインダンスの取り組みでした。

初めは、みんなが自分のことで精一杯で、気持ちを合わせるのが難しかったです



が、自分たちの動きをビデオで見直すことで、できていないところが確認でき、一人一人の意識が高まってきました。それから、今まで以上に練習に熱が入り、友達のアドバイスも聞くようになり、また、友達と一緒にするという楽しさも感じてきました。そして、学習発表会当日は、「みんなの心を一つにして大成功させよう」を合い言葉に楽しくダンスしました。

私たちが、毎日がとても楽しいです。学級のみんなと過ごせることがとてもうれしいです。これからもまだまだいろいろなトラブルが起こるかもしれませんが、その度に、みんなですっかり話し合って解決していきます、学級目標にふさわしい学級をつくっていきます

僕の中にある課題

赤碕中学校2年 市田 光さん

僕の一日は、「おはよう」で始まり、「おやすみ」で終る。これがあたり前だと僕は思っている。毎日のこのあたり前が、おそらく「平和」ということなのだろう。

現代の日本は、ニュースなどで取り上げられる事故や事件、人の命にかかわる事が多い。なぜだろう。僕は「自分だけよかつたらいいや」という考え方が増えているからだと思う。僕にも反省する所が多い。それと、僕は部活に對して、以前から甘い所があつ

たいと思います。

私たちは、このラインダンスを通して、また日々の学級での勉強や行事を通して、つながり合うことがこんなにもすばらしいことだと学んでいます。私たちの町、琴浦町も今よりも、もっともつとみんなの心がつながり合い、笑顔がいっぱいの温かい町にしたいかなければなりません。



だ。だから今年の夏休みは自分に課題を作った。「休まず行こう」だ。毎日三十度を越える日ばかりだった。でも皆が頑張っている姿を見ると、自分も頑張ろうと思う気持ちにしてくれた。友達つて良いものだ。時には、家族のほげ



ましよりうれしい時がある。友達は、自分自身の課題の手助けもしてくれる。ちよつと見方を変えると、そんなことが見えてきた。

お盆が終わった頃、僕の大好きなおじさんが亡くなった。すごくショックで信じられなかった。今年になって、確かに入院していた。お父さんから盆前に、「面会できないから、手紙を書けよ」と言われた。それなのに僕は、書かなかった。僕は、今まで「命」のことを深く考えたことはない。「命」はずつとではないが、ある年月はあたり前のように続くと思っていた。でも、おじの死に直面して、今、僕は後悔している。なぜお父さ

第2回人権・同和教育推進大会

んの言ったことができなかつたのか。本当に悔しい。

人が自分に言ってくれたことは、大切なことが多いかもしれない。「人の話を素直に聞く」これは当たり前で、よく言われる言葉だ。でも、自分の中でかみくだいて行動しているかというところ、できないことも多い。僕にとつて今の課題は、一つ一つの話をしっかりと受け止め、自分の考えを持ち行動していくことだ。

今の日本は確かに平和だ。しかし、そんな当たり前に過ごしている中にも、見過ごしている事は多いと思う。周囲の人の意見、そして本当の自分、もっと自分をしっかりと見つけ、周囲のこともしっかりと見つけ、後悔しない人生を歩んでいきたい。

講演

人権・同和教育は誰のため？

解放社会学研究所 江嶋修作さん

何か最初から真打ち登場ですね。小学校五年生のライندگانの前座を僕が務めるという形が普通ですよ。本当にしっかりとる。びつくりした。そして、子どもたちの言葉。あれは大人に対する強烈なメッセージですよ。いろいろの違いがあつて、お互いいろいろもめるだろうけど、人間関係をうまくやるためには何



だから分かるようになった」と、強烈なメッセージです。「大人よ、口で言うだけじゃダメだ。ちゃんと実践しなさい」と言ってるんです。あれ強烈。勉強になりました。今盛んにいじめ問題が議論されてます。みなさん。大人の世界では、差別をそのままにして置いて、子どもにいじめはいけませんと言えますか。いじめには基本的に三点問題がある。この三点がクリアーできなきゃダメです。一点目

は、いじめと差別の仕組みは全く一緒。二点目は、いじめは子どもの世界で起きてる。大人には分からん部分がある。三点目は、いじめがあるのにないことにする。差別があるけど、ないことにする日本社会の精神的風土があること。一点目、子どもたちは、仲間の中で誰かをはじき出し、みんなで責めていく。そのやり方は、大人を通して学んでいく。今度いじめが結婚する。家族が結婚相手について、「あれはどこの者で。学校はどこしか出てなくて。給料は何ほくらいしかもらってない」とけちを付けていく。差別の仕組み。それをずっと小さい頃から聞いて育つ。つまり、人の排除の仕方を学んでる。

二番目、自分の子どもでも中学生にもなるとよく分からん。ところが、それをきちんとかつて親が意外と少ない。ぼくはよく言つた。中学生に説教する人に、相手はオレンジレンジを聴いてる子に、三波春夫のお富さんを歌つて聴かせるような、ズレがあるぐらいは分かつところ。メッセージが届かんよ。入らんよということは分かつてやろうよつてことです。当事者のことが分かつてないんですから、当事者に聞かないや。これは同和教育の鉄則です。違いますか。部落差別をされる立場で生きてきた人じゃないと分かんこと、いつばいある。だから部落に行つて、話を聞くんです。三番目、北陸の方に行くと、そこに部落があるけど、ないことになつてる。差別があるけどないどころか、部落の人がいないことになつてる。みんな知つてますよ。差別があ



ること。みんなが、ないことにしてる。学校の世界のいじめだけと違います。あることはあるという前提でちゃんと関わる姿勢。その精神風土を造らんとダメです。何か、同和教育でも人権啓発でも、自分のことにならない。同和教育は、一人一人が持つてる人権感覚を研ぎ澄ましための場なんです。じゃあ、人権感覚とは何か。それは、自分以外の人間の人生、生きてることに、きちんと敬意を払うこと。そこを大切にしたら、人を差別することで醜く歪んだ、自分の人生なんかを選択するはずがない。つまり、自分のためということを分かつてほしいんです。

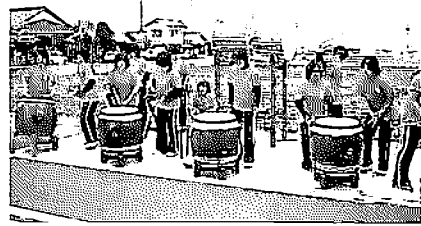
第21回あかさき部落解放文化祭

未来を創造し、自らが部落解放への情熱をたぎらせて

二〇〇六年十一月十八日、二十日までの三日間、赤碕文化センターにおいて開催され、子ども祭りや、解放教育講演会・演芸大会などいろいろな取り組みにたくさんの方が来館し、楽しく過ごしました。

部落解放文化祭は、琴浦の全町民が、笑顔のある出会いとやさしさでつながり、共に故郷を愛し、人間性ゆたかな思いと、かわり合いたい絆の輪を拡げて、あらゆる差別を許さない行動につなげていくことを目的として開催しました。

【子ども祭り】
オープニングは、花咲隊の「十七夜物語」の太鼓から始まり、これから三日間



の祭りを盛り上げる力強いものとなりました。

「ワッショイ、ワッショイ、」子どもたちの元気な掛け声が村の中をみこしと一緒に響きわたります。

各子ども会で作ったみこしには、一つ一つ願いが込められており、「友だちと仲良くする」「差別をなくしていく」「戦争のない世の中になつてほしい」などみんな話合いい、工夫を凝らして作り上げてきました。
子どもたちの元気な声と頼もしい姿に喜びを感じました。

【バザー等・体験コーナー】

日曜日のバザーは、恒例の餅つきをはじめ、お茶席・ポップコーン・うどん・コーヒーショップ・から揚げ・日用品バザーなど高校生や保育園小学校の保護者会、地域の方々の協力のもと盛りだくさんの中で、多くの皆さんが楽しむことができました。

今年のもちつきは、役場職員労働組合の協力があり、出上青年部と一緒に力強く、杵を振り上げていました。もみ手の人たちもつきあがる餅に歓声を上げながら、次々とま



るめ、その笑顔は、とても楽しそうでした。

参加者体験では、足指の力測定や太極拳をして、日ごろ体験する機会がありませんのなのでみなさんが興味深く体験され、これからの生活にもつながっていくようです。

【小学生意見発表】

今年も、赤碕小学校六年生・成美小学校六年生の意見発表と四年生の解放劇が取り組まれました。子どもたちは、普段の生活から「同和」教育を通して、部落差別を許さない自分と仲間をつくっていくことをしっかりと伝えました。

【演芸大会】

二ヶ月ぐらい前から各区での練習が始まり、毎年いろいろな趣向を凝らして、笑いあひ声援ありの中で開催されました。歌や踊り、手話など大人から子どもまで楽しく大いに盛り上がりました。この演芸を見ないと一年が終わらないと言ふ人もあり、楽しいひとときでした。



【年長児交流会】

赤碕中学校区の年長児の子どもたちが一同に集まり、園の紹介や、歌やダンスと一緒に取り組み、楽しい出会いをしてたくさん仲間がいることを知りました。

また、保育士の手話を交えた歌や劇は、友だちは大切な仲間であることを伝えるものでした。
普段の生活を思い出しながら、考えるきっかけとなり、目を輝かせながらじっと見ている子どもたちは、とても感動しているようでした。また、劇を取り組むことで保育士も仲間関係や、保育について考えることができました。

小学生意見発表

「今の自分にできること」

ぼくが、自分自身を振り返ったとき、まず、頭に浮かぶのは、人を傷つけてしまったことです。人を傷つけて面白がっている「ひどい心」が働いていました。自分ではそんな心が嫌です。

自分の弱い心とずるさを直したいのです。

部落差別について、これまで仲間と一緒に学習してきました。ぼくは、どう考えてもおかしいし、そんな差別が平気で行われることは許せないという気持です。

今の自分にできることを考えてみました。

一つ、いつでも堂々と発表ができることです。

二つ、誰にでも注意できることです。自分の気持ちを伝えたり、悪いことを悪いと言え、力をつけて行動することです。

普段の生活の中から、学習や仲間づくり、解放「学習会」にがんばりたいです。



「先輩たちから学んだこと」

「ぼくたちの思い」

差別とたたかってきた出た命の人たちは、自分らしく生き、命を守ってききました。ぼくたちは、その誇りや強い思いを受け継いでいかなければいけないと思いました。

ぼくたちは、一人ひとりを大切に仲間になろうとがんばってききました。でも知らず知らずのうちに友だちを傷つけていることがあります。

差別している人は、おもしろ半分です。いつになってもなくなりません。ぼくも悲しみやいかりを他の人につけてしまいました。本当に自分が情けなくなりました。

話し合っ分つたのですが、差別した人も、したくてしたわけではないと分かりました。その時、話し合っれば苦

しまなかつたと思います。ぼくたちにはできることがあります。小さな問題から解決することです。そうしないと大きな問題に立ち向かえません。

一人ひとりを大切に、もつと仲間と話し合っ、自分の力で解決できるようにがんばっていきましょう。

解放教育講演会

「民衆史から学ぶ

これからの生き方」

講師 寺木伸明さん
(桃山学院大学)



部落史を学ぶ大切さは、人間の労働と生産の歴史を知ることであり、人々が豊かに関わり合い、人間はつながり合っこそ生きられる、という大切さを学ぶのである。



当たり前ですが、私たちは、一人ひとりが大切な仕事を担っているから、命をつないで生きている。どんな仕事も大切で必要な仕事であり、一つとして無駄な仕事はない。

にもかかわらず、寺木先生は、これまで持たされてきた概念や世間体意識に惑わされて、父親の仕事や生まれ育つた環境に不満や不安らしきものを抱いていた。そんな中で、黙々と力強く働き続け、差別とたたかう被差別民の歴史と出会えた。

その真実の生き方を研究し学ぶ営みによって、自らの存在そのものを見つめ直し、取り戻す大切さを知った。

部落史、部落問題を自ら、しかも研究者として学んだことは、その事実が「私にとつ

ても大きな財産であり」これからは続けると明言された。「差別は、人がつくつたものであり、人がつくつたものは、人によって変えていくことが出来る」と言われ、必ず、部落差別はなくせる、なくなると結ばれた。

まず、一人ひとりが身近なところからさまざまなたたかいを展開して、自らが反差別の生き方に学び、行動しよう



お知らせ
解放教育講演会
とき 2月23日(金) 午後7時30分～
会場 赤碕文化センター
演題 「差別意識に振り回されないために」
講師 八木晃介さん (花園大学教授)

同和保育公開研究会

浦安保育園

自然物を使って遊ぼう

(ままごと・魚釣り・的当てなどのコーナー遊び)

四歳児(年中児)・五歳児

(年長児)の異年齢活動

【ねらい】○ 異年齢の友だちとの関わりを大切にし、仲間の事を考えながら、友だちと一緒に遊びが進められるようにし、より遊びが楽しめるように関わる。○ いろいろな場面で、自分の思いをことばで表現し、お互いの気もちを受け入れ大切にしながら、自然物で遊ぶ楽しさを味わうようにする。○ 年下の友だちを誘ったり、教えたりしな



から世話をし、やさしく関わってつながりができるようにする。

【遊びの姿】○ ままごとコーナーで、年中児の子どもが

エプロンを結ぶ時に、年長児の子どもに頼んでいる姿が多くあり、関わり合っていた。

○ 困った事や悲しかった事など自分の気もちを子どもなりのことばで伝える事が出来た。

○ 各コーナーでどんぐり・しいの実をこちそうに見立てて遊んだり、転がしたり、

松ぼっくりのけん玉をしたり、おなもみの的当て等自然物に触れて、それぞれが楽しんで遊ぶ姿があった。

【今後に向けて】

○ 三歳児(年少児)・三歳未満児は、遊んでいなかったの

で、子どもたちから『一緒に遊びたい』という意見が出たので、一緒に遊ぶ機会を作った。

魚を並べたり、釣竿を渡したり、ままごとでこちそう作りを一緒にしたりなど、年

下の友だちへの関わりにやさしさを感ずる事が出来た。

日々の保育の中で異年齢交流をしていきたいと思えます。



○ 自分の思っている事を相手にわかるように話したり、

相手の思いをしつかり、受けとめたりして、仲間とのつながりを深め、その中で一人ひとりの素敵なところを発揮しながら、自分たちで生活や遊びを進めていく事の出来る仲間づくりをめざしていきたいと思えます。

成美保育園

五歳児

サーキット遊びをしよう

【ねらい】

運動会での遊びをもとに『次はこんなことが

したい』『くもおもしろそうだな』など、みんなで相談して、遊びをさらに発展させました。自分たちの考えを遊びに活かして、友だちと関わって遊びを進め、みんなで遊ぶことを楽しむ子どもに。また、これから出会ういろいろな場面でも自分の思いを伝えていく子どもに育っていくことをねらってこの遊びを設定しました。

【遊びの姿】

気もちの良い青空のもとで、「あそびのグループ」と「ポイント係りグループ」に分れ、交替して遊びました。「あそびのグループ」では友だちの応援を受け、遊具や用具などで身体をしつかり使って遊ぶおもしろさや達成感を味わいました。「ポイント係りグループ」は、み



んなで決めたルールに気をつけ、片足立ちやフープ回しては目標の数をかぞえ、竹を使つてのリズム跳びでは楽しんでできるような歌をうたい、登り棒では足を支えるなどして応援しました。声を掛け合いながら、みんなで楽しもうと意欲的に遊びました。

【今後に向けて】

遊んだ後、『今度は小さい友だちと一緒にしたい』という声があり、全園活動に挑戦しました。年下の友だちが安心できるには、また、遊びやすくなるにはどうしたらいいかなど、関わり方や遊び方を考えていきました。当日、『ポイント係り』として遊び

をリードしてみんなで遊んだことは、年長児としての大きな喜びと自信となりました。

これからも自分たちで遊びや生活を創りだすことができ

る子どもも主体の保育の実践。自分なりの表現の仕方

に一人が自信をもち、自分の思いを伝え、友だちの思いも受けとめつながりあう仲間づく

り続けていきます。

大山乳業の取り組み

〜地域社会から信頼される企業をめざして〜

当組合は、七年前に鳥取県農協中央会の指導のもと人権問題啓発推進委員会を設置しました。委員長は組合長、副委員長は専務理事、労組委員長とし、委員は各職場単位の責任者で構成されています。

推進計画の基本方針は、国民的課題である部落差別解決への取り組みは、「人間性が尊重される公正な社会の建設」を協同組合運動の究極の理念・目標に掲げてきた「農業協同組合」にとって、極めて重大な社会的責務であり、他の一般企業にみられない重要な意義をもつと考え、社会の要請に貢献し、地域社会から信頼される農業協同組合として成長発展しなければならぬというたつてています。

当初は外部研修に参加したり、休憩時間に啓発ビデオを視聴する程度で、新入職員対象の人権・同和教育をのぞけば、企業内研修は行っていない



せんでした。

農協中央会の指導を受けながら半年かけて、職場内研修計画を練って、二〇〇三年(平成十五年)七月によく企業内研修を行うことができました。研修に先立ち、職員の同和問題に対する意識調査(二〇〇〇年鳥取県実施調査抜粋)を実施して鳥取県の意識調査結果と比較してみたところ、研修に参加している割合は高く、部落差別の存在の認知度からみても、人権に対する関心は高く、PTAや地域で学習してきた成果があると考えられます。

企業内研修は、全職員を一同に集めて行うことはできないので、事前に職場内で調整して月曜から金曜まで五回に

分けて開催しました。毎回農協中央会から講師を派遣してもらい、農協がなぜ同和教育に取り組むのか講演を聴いた後、鳥取県が製作した啓発ビデオを視聴しました。

全国人権・同和教育研究大会に

参加して

東伯文化センター

中原紀子さん

第8分科会「生活課題と啓発活動」に参加しました。

その中で、ムラの七十代の女性が「最初は、ただ会に参加をしてくるだけであったが、続けて参加し学習をすることで、いろいろな事がわかった。先人のたくましさや生き様、子どもの命を守るための強い思いを知り、自分のムラに誇りが持てるようになってきた。この姿をどのように伝えていくのが重要である。上からの学習ではなく、自分の為の自主的な学習を続けていくことが必要である。」と力強く話されました。

人権・同和教育の学習を積

新工場建設・稼働という一大プロジェクトのため、二年間企業内研修はできませんでしたが、今年は「身近な人権について考える」をテーマにした研修を予定しています。

成美小学校

山本美鈴さん

鳥取県でこの大会が開催されて以来、久しぶりに参加しました。

今大会で有意義であったことは、中山英一さんの「小説『破戒』」についての講演、奈良県人教の桜井市の先生方の実践、繁樹先生の人権コンサートが聴けたことです。

み重ねる事により、正しい知識を身につけ、生活の中での固定観念や偏見に気づいたり、見抜く力を身につけ、自分自身を見つめ直すことが大切だと思っけています。又、いろいろな会に参加して人と人とのつながりを大切にし、ネットワークを広げていく事も自分を成長させてくれるものだと思います。

大会応援ソング「あなたのことばで」に迎えられた今大会。この歌詞の中に「あなたには力がある この町を変えらるため あなたにはあなたでなけりや できないことがあります」という部分があります。自分自身何ができるのかしっかりと考えて行動していきたいと思っけています。



「気づき」から「自らを変える」へ

★今回は、自らにある差別意識などに気づき、自らを変えるということについて学びます。

〈差別をする側に視点をあて考える、自分が差別をしていないかを考える〉

①なぜ、人は差別されるのか ②なぜ、人を差別するのか この2つの問いかけは同じではありません。
①は差別される側に、②は差別する側に視点をあて考えています。差別はする側に原因があるのであり、差別をする人がいるから、差別が残されているのです。

〈自らを振り返る、そして自分を変える〉

わたしたちは継続して学ぶことにより、自らの意識、行動を振り返り、さまざまな間違いに気づいてきました。そして、自分はどうあるべきか、自分の生き方を見つめ直してきました。仲間とともに語り合い、どのような生き方をしていくのか、差別を見過ごし差別を許すのではなく、差別を許さず、なくすため仲間と共に行動する姿勢を明らかにしてきました。そうしたことにより、間違いを改めるよう行動できるようになってきています。

わたしたちの日常で、こんな変化が表れていませんか。

例：夫婦の会話



◎周りの人たちの差別意識に気づき指摘できる。

①の発言を聞いた場合に、家族が間違いに気づき、指摘できるというように、地域や家庭、職場などで間違いを指摘しあえる人間関係が作られています。

◎自分の身近な生活の中には、さまざまな偏見、不合理があることに気づく。

自分が慣習、迷信、世間体などにとらわれ生きていくことが差別につながっていることに気づく。自らが無自覚に、そうした社会の仕組みや価値観を存続させている、支えていることに気づき、改める。

社会的・文化的に性別による役割等の性差が作られていること、そのことを自分が当たり前と考えていることに気づき、その間違いを改めるようになっています。

◎自らが無自覚に差別していることに気づく。気づこうともししていないことに気づく。そんな自分の意識、行動を考える。

①のように料理は女性の仕事と決めつけていないでしょうか。②のように料理をする、また、家事の役割分担をするなど自らの差別意識に気づき、改め、お互いを大切に寄り添いあうための行動ができるようになっています。

〈学び続けることで、自らを磨きましょう〉

◎みんなの意識はどうでしょうか(2000年同和問題についての県民意識調査の報告書より抜粋) 「講演会・研修会への参加状況」と「他人への人権侵害意識」との関連 (単位：%)

講演会・研修会 参加状況	他人の人権を侵害したことはない					
	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そうは思わない	そうは 思わない	どちらとも いえない	不明
10回以上参加	25.9	27.9	11.8	18.6	14.9	1.3
参加したことがない	51.5	22.0	3.2	7.5	12.8	3.0

- ・研修会等への参加回数が多い人は、自らを振り返り、他者への人権侵害に気づくことができる。
- ・研修会等へ参加したことがないとする人のうち、半数が他者への人権侵害に気づいていない。
→学習を積み重ねていないと自分が他者を傷つけていることに気づけない。
- ・同じ調査の別項目では、研修会等への参加回数が多い人は、部落問題について自分の問題として、解決のために努力したいと考える人が多いという調査結果が出ています。

研修会や懇談会などで共に自らを語り合い、他の人の生き方、考え方、価値観を知ることにより、自らの差別意識などに気づくことができるようになっていきます。また気づく力が付いていきます。

さまざまな人権問題に対して、何度も何度も、常に、自分自身の意識、行動を振り返り、自らの生き方を問い続け、差別を許さない自分へ自らを変える、また、自らが変わるすばらしさや喜びを実感していきましょう。